

ヨーコ

黒田亮平

朝五時、玄関のドアが軋む音をわたしは目を覚まして聞いている。リビングのテーブルには昨日の夜の残り物がラップをかけておかれている。朝七時、母のオレンジ色のビブスは汗でぐつしょり濡れている。手に握られたビラの束には排外主義と国粹主義の俗悪な文字が踊っている。見知らぬ通行人にペコペコ頭をさげては無視されつづける母のまえを、わたしは見知らぬ通行人として通り過ぎる。そのとき、母とわたしは赤の他人同士になる。

ヨーコ

おまえは太陽みたく明るい子に育つようにヨーコと名付けられたのだ

おまえは陽子であり妖子である

午睡する私を見下ろすおまえの口元には不敵な微笑

私のなかにあやしいものをよびますおまえ

ヨーコ おまえは溶固であり容子である

おまえは流れつつ固まる凝固質の流体

おまえはひとつのかずら風景である

ヨーコ おまえは幼子であり養子である

ただいちどしか語られることのない寓話であるおまえ

横であり縦であり無限の拡がりをもつカルテジアン座標であるおまえ

座標軸のなかに斜線をひくとその裂け目から生まれた

それが私である